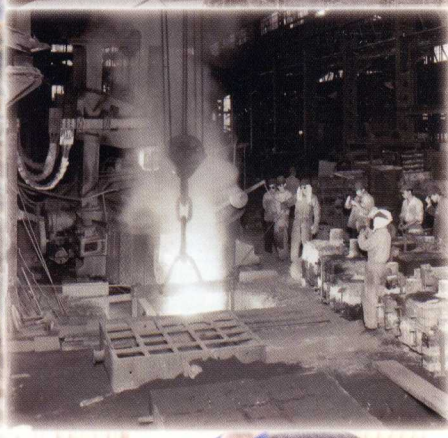
レンガドックかわら版

第8号
2015.10.1

産業遺産と浦賀の歴史と今を伝える広報誌



Contents

02 イベントリポート1
帆船日本丸DVD上映会
咸臨丸子孫の会講演会

03 連載 チラリ **ドック見学会**－機関工場と天井クレーン編－

04 イベントリポート2
夏休み子ども工作体験と産業遺産見学

06 連載 うらが今昔⑧
浅野総一郎と浦賀ドック

07 連載 ドックのお話⑧
昔、ドックで働いていた方へインタビュー

08 連載
うらうら散歩

浦賀ドックには

歴史的価値の高いレンガドックをはじめ、産業遺産が集積しています。

レンガドック

レンガ造のドックは日本に2基しか存在しません。もう1つの川間ドックは現在ゲート（扉船）が開放され海と一体になっているため、ドライドックとしての形を残すものは、浦賀ドックが日本で唯一となります。

5月23日(土)、第43回レンガドック活用イベントを第17回咸臨丸(かんりんまる)フェスティバルに参画して開催しました。(仮称)ミュージアム・パーク推進センターでは、帆船日本丸の建造についてのDVD上映を行いました。また、咸臨丸フェスティバルに参画ということで、咸臨丸の太平洋横断のパネル展示のほかに、咸臨丸子孫の会による講演を今回新たに行いました。

住重OB中島二三男(ふみお)さん

帆船日本丸ＤＶＤ上映会

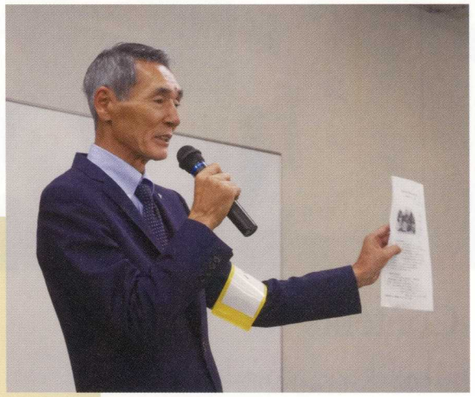
住友重機械工業(株)浦賀工場で建造された帆船日本丸について、当時働いていた中島二三男(ふみお)さんが解説を行い、その後に建造時の様子をまとめたDVDを上映しました。

浦賀で建造された帆船日本丸は、二代目にあたり、初代と比較するとだいぶ大きくなりました。帆をすべて広げた総帆面積が約2760平方㍍となり、初代帆船日本丸より約15㌫大きくなりました。

帆船にはおびただしい数のワイヤーロープが使われています。このロープの張り方は、1本の強さを変えると他のすべてに影響します。造るときには張力計というものを使っていましたが、最後は航海訓練所の先生方が手でロープを揺らして、その張り具合を確認しました。

咸臨丸子孫の会講演会

咸臨丸子孫の会幹事　小林賢吾さんが、浦賀出身者の咸臨丸乗組員の活躍として、ご自分の祖先にあたる濱口興右衛門(はまぐちおきえもん)について講演しました。


咸臨丸子孫の会　小林賢吾さん

咸臨丸は万延元(まんえん)(1860)年、日米修好通商条約批准書(にちべいしゅうこうつうしょうじょうやくひじゅんしょ)交換のために派遣された、遣米使節の随伴艦(ずいはんかん)として浦賀から出港し、日本人初の太平洋横断を成し遂げた船です。乗組員として、良く知られているのは勝海舟、福沢諭吉、ジョン万次郎だと思います。

祖先の濱口興右衛門は天保(てんぽう)11(1840)年、11歳の時に浦賀奉行所の同心となり、安政(あんせい)2(1855)年、浦賀奉行所が建造した鳳凰(ほうおう)丸の乗組員になりました。万延元(1860)年には咸臨丸に教授方・運用方として乗船し、勝海舟たちと一緒に渡米しました。その後、明治3(1870)年に横須賀製鉄所に勤務し、多くの艦船造船に携わりました。

咸臨丸には濱口興右衛門の他にも浦賀奉行所の出身者が多く乗船していました。この会場に来場している人の中にも、多くの咸臨丸乗組員の子孫がいます。

チラリ ドック見学会 機関工場と天井クレーン編

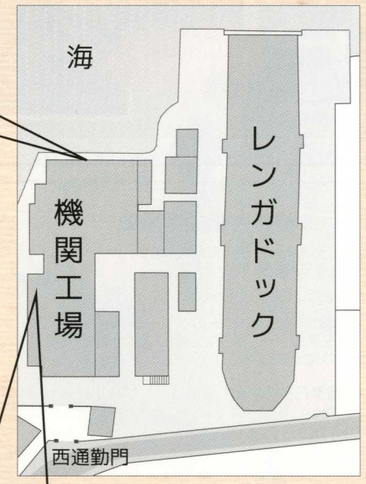
西通勤門を入ると正面に、機関工場があります。機関工場では船の心臓部のエンジン、ボイラーなどの内燃機関を船から取り外して修理していました。

機関工場の建物は鉄骨構造で昭和13(1938)年に建てられました。その後西通勤門側の建物が昭和19(1944)年に増築され、その部分は鉄筋コンクリート構造となっています。

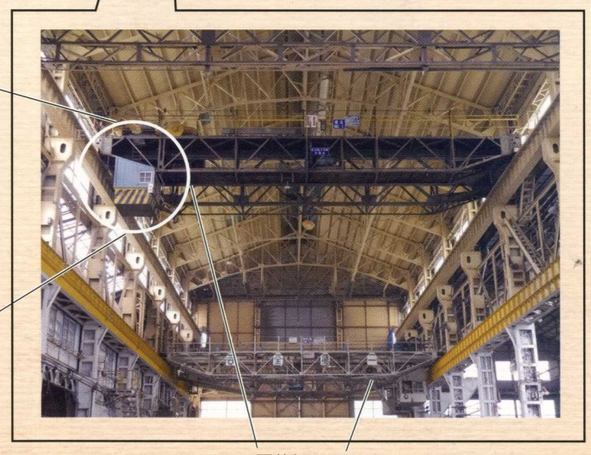
機関工場では、大きく重たいものを扱うことが多く、機関工場の天井に設置された天井クレーンを使用して荷物を移動させていました。

現在機関工場の天井クレーンは50㌧つりが1基、15㌧つり1基、10㌧つりが1基、5㌧つりが2基あります。50㌧つりの天井クレーンは機関工場内の移動だけにとどまらず、海側までせり出して移動でき、船に直接荷を積んだり下ろしたりできるように造られています。この天井クレーンだけ他の天井クレーンよりも高い位置に設置されています。ちなみにクレーンの定義とは、動力を用いて荷を持ち上げることができ、水平方向に運搬できる機械装置のことです。人力によって荷を持ち上げるものはクレーンではありません。

機関工場は咸臨丸フェスティバルや中島三郎助まつりなど、地元の催し物に活用されています。



50㌧つりの天井クレーン、ボックスは運転室


天井クレーン

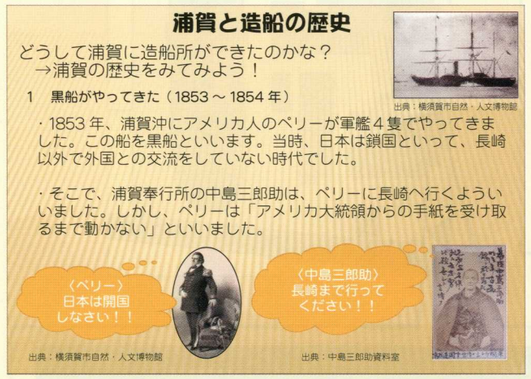
夏休み子ども工作体験と産業遺産見学

平成27(2015)年8月1日(土)に開催した「第44回レンガドック活用イベント」では、浦賀周辺の小学生へ「浦賀ドックに関する夏休みの自由研究をしてもらう」ことを目的に、①「浦賀と造船の歴史」のミニ講座、②産業遺産見学、③造船技術をつかった工作体験を行いました。ミニ講座の講師は、浦賀ドックで働かれた経験をお持ちの、中島さんに務めていただきました。

ここでは、ミニ講座で使用したスライドの紹介を中心に、当日の様子をリポートします。

造船所ってどんなところ？

住友重機械工業(株)浦賀工場の操業時の写真を使って、造船所の役割や造船の工程を解説しました。
造船の工程の詳細については、第7号で特集しています！

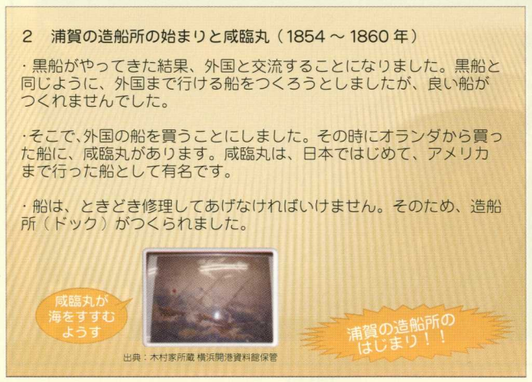


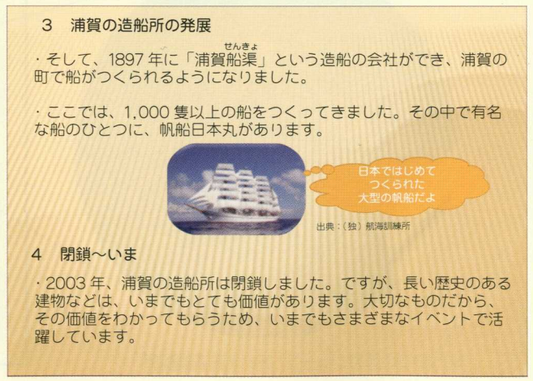
浦賀と造船の歴史

浦賀に造船所ができた理由や、浦賀の造船が発展した過程について、

- 黒船来航と開国
- 勝海舟などを乗せ、アメリカまで航海した咸臨丸
- 日本初の純国産大型帆船となる帆船日本丸

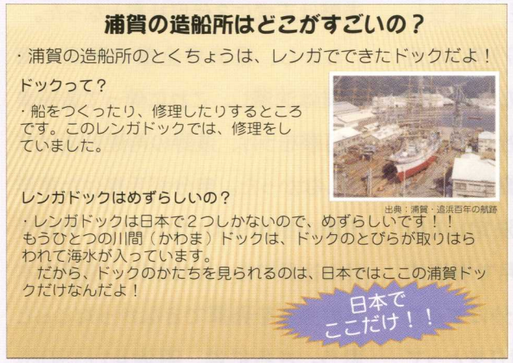
をポイントに解説しました。





浦賀の造船所はどこがすごいの？

今から100年以上昔の明治32(1899)年に完成したこのレンガドックは、以後100年以上の間、船を修理してきた場所であることと、レンガ造のドックで日本で唯一ドライドックとしての形を残すものであることを解説しました。

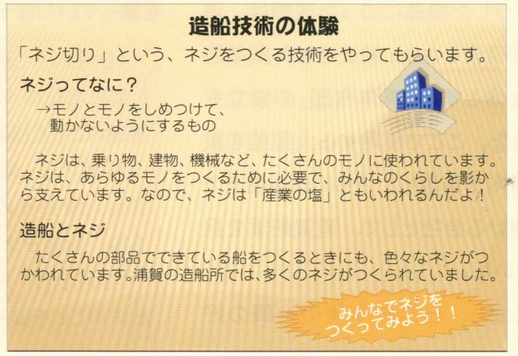


当日は、厳しい暑さの中でしたが、32人の方にご参加いただきました！

参加者からは「浦賀の歴史を知っただけでなく、それとつながりのある工作ができていい思い出になった」、「夏休みの自由研究で活用したい」などの感想をいただくことができました！

造船技術の体験

工作で体験する「ネジ切り」は、造船技術のひとつであるだけでなく、あらゆる工業製品の基礎となるネジをつくるという、ものづくりの基本的技術であることを解説しました。



うらが今昔⑧

浅野総一郎と浦賀ドック

郷土史家　山本詔一

京浜工業地帯の生みの親といわれる浅野総一郎は、浦賀船渠株式会社が産声をあげた時に5万円の出資をした、大株主のひとりであった。浅野が造船や船の修理にこだわりを持つようになるのは、三菱が経営の主導権を握っている日本郵船に対抗して、明治20(1887)年4月に浅野回漕店を立ち上げた時からであった。

明治29(1896)年に日清戦争に勝利した日本は、国として船舶の不足を痛感したため、明治29(1896)年に賠償金をもとに造船奨励法と航海奨励法を定めた。造船奨励法は国内の造船所に発注される700㌧以上(後に1000㌧以上)に一定の補助金を、航海奨励法は建造から15年以内の1000㌧以上かつ10㌫以上で走れる鉄鋼船に補助金を出すものである。

こうした機運にのった浅野は、浅野回漕店をさらに拡充させ外国航路を主体とする「東洋汽船」の設立を図った。ここで使用する大型船を東京湾内で修理し、さらには造船まで手掛ける会社として、浦賀船渠を捉えていた。

しかし、日露戦争後の一瞬の好景気から転じた不況の大嵐が、浅野に襲いかかってくる。浅野が浦賀船渠の三代目社長(会長)に就任したのは、明治40(1907)年10月であった。浦賀船渠はこの年の2月、海軍少将であった2代目社長の早崎源吾が、株主総会で増資して社業の立て直しをすることに決定していた。しかし、わずか8か月で増資するどころか、資本金を半分にすることとなってしまい、その責任をとって早崎社長が辞任した後任であった。

浅野自身が浦賀ドックに構っていられるような状況でなかったが、実業界の師と仰ぐ渋沢栄一からの要請であれば、簡単に断ることもできなかったのだろう。

そのことが明治40(1907)年の渋沢の手帳に、以下のとおり記されており、2人で浦賀ドックの再建策を練っていた様子がわかる。

> 10月2日　浦賀船渠の委員数名と共に浅野総一郎氏に面会　会社整理のことを協議
>
> 10月7日　船渠委員、浅野氏と会合　同会社のことに関し、種々協議、覚書を交換
>
> 10月8日　浅野氏来訪　浦賀船渠のことを談ず

こうして明治40(1907)年10月28日に臨時株主総会が開かれて、浅野は正式に3代目社長となった。

しかし、経済界全般の不況で海運業は沈滞し、これに伴って造船業も打撃をうけ、浅野の再建計画は成功しなかった。自分が手掛けた東洋汽船の状況もよくない中で、引き受けた社長であっただけに、浅野の本当の強さを発揮できなかったことと思う。さらには、明治41(1908)年3月2日には浦賀本工場事務室が全焼する被害にも見舞われた。しかし、こうした状況でも浦賀船渠を懸命にかばい、継続に力を注いだのは、東京湾口にあるという地形的な条件の他に、反三菱を唱えた渋沢や安田財閥の大きな援助があったことも忘れてはならない。

浅野総一郎　　出典：浅野セメント沿革史

ドックのお話⑧

昔、ドックで働いていた方へインタビュー

前号では、切断した後に鉄板を曲げる「曲げ加工」について紹介しましたが、今号では切断・加工した部材を組み立てる「小組立」について、伊東洋吉さんにお話をお伺いしました。

伊東 洋吉さん

ー入社当時の職場の様子を教えてください

昭和46(1971)年に住友重機械工業(株)浦賀造船所に入社し、中組立を8年間担当しました。その後、人事異動で小組立に配属され、以後20年間この業務に携わりました。入社までは東京や横浜で働いていましたが、家族の関係で浦賀に引っ越したのをきっかけに入社しました。前職は造船と全く関係なかったので、初めての経験に戸惑うことばかりでしたが、家族のために一生懸命やってきました。

ー小組立ではどのような作業をするのですか?

前工程から送られてきた部材のうち、大きなものはクレーン、小さなものは手で支えながら、仮留めの溶接をします。作業は基本的に1人で行うので、プレッシャーもありましたが、自らの成果が見えやすいです。うまく作業できた時の喜びは今でも忘れません。

溶接の熱で部材にゆがみが出てしまうことがあります。その際は、難しいものは曲げ加工の担当者にお願いして直してもらいましたが、簡単なものでは私たちで直しました。

ー小組立は1人の作業が中心とのことですが、職場はどのような雰囲気でしたか?

職場の雰囲気では、「団結力」のあるところが一番良かったところだと思います。私は中途入社だったため、先輩の多くが年下でしたが、先輩の皆さんは私の仕事をよく見てくれていて、困ったことがあるとすぐに助けてくれました。当時は人員が少なかったので、色々な作業を1人でしなければいけない分、覚えることが多かったのだと感じています。また、1年目にクレーンの免許を取得したのですが、その際は先輩が貴重な時間を割いて練習につきあってくれて、大変嬉しく思いました。

コミュニケーションをとって団結することは、同じ工程内だけではなく、前後の工程とも必要でした。例えば、前工程の作業が遅れてしまうと、組み立てる部材が無い訳ですから、小組立も予定どおりの作業ができません。その際は、前工程の班長と話をして、最も必要な部材を優先して作ってもらうようにお願いしました。反対に、小組立の作業が遅れると、後工程に迷惑をかけてしまいます。そうならないように、作業に遅れが出た場合は、残業して遅れを取り戻しました。

緊張感を持って作業していましたが、時には失敗してしまうこともあります。自らで失敗を取り戻すことができる場合もありますが、中には前工程にお願いして部材を再度作ってもらわなくてはならない場合もあります。その際も、バレーボール大会や盆踊りといった職場のイベント、仕事終わりに行った立ち飲みなどでとったコミュニケーションに助けられました。

作業を行っていた工場前にて

うらうら散歩 その6

浦賀駅を降りて左手、観音崎通りを鴨居方面に進むと、八雲神社入口近くにワインをはじめとするお酒や食料品などを取り扱う「ワインセラーみやまさ 宮政商店」があります。店主の宮井宣行さんに、お店の成り立ちや浦賀ドック従業員との関わりなどのお話をお聞きしました。

宮井　宣行さん

先祖は干鰯（ほしか）問屋

先祖は江戸時代に干鰯問屋※を営んでいた宮井さん。干鰯問屋が酒屋となった正確な理由は分からないとのこと。お店が今の場所となったのは、昭和38（1963）年。浦賀工場の敷地拡大に伴って、道を挟んで反対側にある今の土地に引っ越したことがきっかけです。

※干鰯（ほしか）問屋：水揚げされた鰯を油抜きして干して作る干鰯肥料を扱う問屋。干鰯は江戸時代に発達した綿作の肥料として使用されていた。浦賀の干鰯問屋は、江戸時代初期において全国の干鰯商いをほぼ独占していた。

立ち飲みからワイン蔵へ

お店に立ち飲みのスペースがあった頃は、浦賀工場の東側に位置する通用門が近いことから、鴨居方面に帰る工員さんが多く訪れたそうです。工員さんが主なお客さまだったので、立ち飲みの営業時間は定時で退社する人に合わせた夕方4～5時の1時間が中心でしたが、残業した人がいらっしゃれば、その人のためにお店を開けることもありました。先代がお店を切り盛りしている頃だったので、あまりはっきりとしないと前置きしつつも、毎日のようにいらっしゃる常連さんがいたのは覚えているそうです。

年末の仕事納めの日は、工員さんがお酒やおつまみを買いに来ました。「当日は工場内でお酒を飲むのを楽しみにした工員さんでお店がいっぱいになりました。品切れとならないように、仕入れの量をいつもより増やして準備していました」と、当時を懐かしそうに語ります。

お客さまには住友重機械工業㈱の社員だけでなく、協力会社の従業員も多くいたそうです。先代は特に親方と呼ばれる協力会社の経営者との付き合いが深く、お中元やお歳暮の時期には、浦賀工場に勤める住友重機械工業㈱の課長や係長の自宅までお酒の配達を頼まれました。近くの配達もありましたが、遠いと追浜方面まで行ったことも。

立ち飲みのお客さまが減少したことなどに伴い、昭和63（1988）年にワインを中心としたお店にするため、大規模な改装を行った宮政商店。今のお店の一番の自慢は地下にあるワイン蔵です。蔵の周囲を地下水が流れることで、夏でも涼しいことに加え、昼夜の温度差がほとんど無いことから、ワインの保存・熟成に最適な環境だそうです。お店は小学校の通学路に位置し、「子ども110番の家」になっていることから、子どもが下校時にトイレを借りに来ることもちらほら。お店は今でも地域の皆さんに愛され続けています。

地下のワイン蔵

イベント情報

第46回レンガドック活用イベント

★事前申込制★

（仮題）私たちのまちの歴史 －浦賀ドックと浦賀住民の関わり－

浦賀ドック操業時に住重や浦賀の町で働いていた方々が、当時の写真を持ち寄り、プロジェクターで上映しながらまちの様子を語ります。その後には、レンガドックの「底」まで下りる見学会をします。

日時：2015年12月5日（土）
13：00～16：00（12：30開場）
場所：（仮称）ミュージアム・パーク推進センター
定員：事前申込　先着100人　参加費：無料

申込期間：2015年11月16日（月）～12月3日（木）
申込方法：お電話にて横須賀市コールセンター
（TEL：822-2500／
受付時間8：00～20：00、年中無休）
へお申込みください。

●本誌『レンガドックかわら版』は、浦賀行政センターなどに置いてあります。
●次号は2016年4月1日発行予定です。

ご意見、ご感想もお待ちしています！

発行　レンガドック活用イベント実行委員会
お問い合わせ　レンガドック活用イベント実行委員会事務局
（横須賀市 都市部 市街地整備景観課内）
〒238-8550 横須賀市小川町11
電話 046-822-8526　FAX 046-826-0420
E-mail keikan-ci@city.yokosuka.kanagawa.jp